

湯沢高・湯沢翔北高の生徒ら

有機農業にチャレンジ



サツマイモの苗を植える高校生と小学生たち

湯沢高校と湯沢翔北高校の生徒らが、化学肥料や農薬に頼らない有機農業に挑戦している。湯沢青年会議所（湯沢JC）が地域貢献活動の一環として企画し、市内の学校に声をかけて実現した。収穫した農産物で商開発にも取り組む。21日に市内の小学生と湯沢市下関の畑で種まきや苗植えを行った。

JC企画 収穫後は商品開発も

湯沢JCメンバーで、市三開地区でセリの実産販売を手がける「CRAS（クラス）」代表の奥山和寛さん38が中心となり企画した。国が2050年に化学農薬の使用量を50%低減し、有機農業を総耕地面積の25%に拡大する目標を示していることから、有機農業への挑戦を湯沢JC側が提案した。奥山さんは「1年かけて農作物を育て、その収穫物で新たな商品企画・販売することで主体的に課題と向き合い解決する力を養ってもらいたい」と話す。

湯沢高校2、3年生の生徒有志3人と、授業の一環で地域の課題解決に取り組む湯沢翔北高校の3年生20人が参加。エタマメ、ホウレンソウ、サツマイモ、カボチャをクラスの畑約18で育てる。

農業への関心を高めながら地域住民と交流しようと、21日の作業には湯沢東小・湯沢西小の5年生約1

50人も参加。開会式では湯沢翔北高校の伊藤優空さんが「収穫した野菜を食べる健康で元気になってもらいたい。取り組みを通して湯沢市を活性化したい」と意気込みを語った。児童生徒は10班に分かれて種まきや約3千本の苗植えを行った。

湯沢高校3年の佐々木美空さんは「有機で育てたホ

ウレンソウは苦みが少ないと聞く。苦手な人でも食べられる商品を作りたい」と話した。

生徒は今後、月1、2回程度水やりや除草作業を行う予定。収穫は10月上旬の見通し。その後は地元企業と連携して各高校で新商品の開発と販売に取り組む。

（館岡朋美）



雑草防止などのため、畝にビニールをかぶせる作業も行った